

狸

狸は東南アジア特産で本州、四国、九州に産し、北海道にはエゾタヌキ、朝鮮にはカウライタヌキを産する。狸には大体三色変型がある。背面に八文字状の黒色あるハチモンヂ、背に黒帯が十文字に交錯したジフモンジ、及び白子で僅かに赤味のあるシロの三通りであり国内産では北海道産のものが毛質優良である。

狸はイヌ科のうちでは変つた動物で木にも登るしオットリしていて警戒心がうすい、自分で穴を掘る力はないから、本州の狸はアナグマ（ムジナ）の掘つた巣にはいり込んで住む、家族づれで押しかけアナグマと一緒に暮すやつもいる、一つあなのムジナというのはここから出たという、北海道にはアナグマはいないからエゾタヌキたちは木の根の下などに巣をつくる、三月から四月にかけて繁殖期で胎内に六十二日いて生れる。

アナグマの巣にはいり込んで住む程のものであるがトイレは穴の外にあつて親も子もそこへ通つて用をたす、時にはそのフンが四、五十センチも積るから昔から（ためグソ）とよばれて有名だ、夜目はあまりよくないからためぐそのにおいをたよりに自分の巣へ帰るともいわれる、猟師はこれをたよりに巣を見つける。狸は毛皮として多く用いられるのであるが、毛は刷毛、筆などに用いられる、毛としての種別は黒一、黒二、白一、白二、尾狸などと生えている部分や毛の色、毛質の良悪によつて多くの種類に選別され、このほかに狸ヌがある。

マミヤムジナはアナグマの方言でアナグマは大きき、毛色等一寸タヌキに似ているがイタチ科の動物で（タヌキはイヌ科）よく見るとまるで違う。毛は、たぬきよりもはるかに粗く、太く、かたく、毛皮としては良くない、毛はヒゲブラシや歯ブラシに用いられる、狸は鉄砲の音などでビックリしすぎると仮死状態になつて倒れて

しまうこともある、死んだと思つて狸師が近づくと、起き上つて逃げだすので「タヌキ寝入り」などという言葉も生れたのであろう。

古川柳に

起きなんしなどと狸へよりかかり

などがある。家畜ではないが飼いならしてみると面白い。

野ネヅミを好んで食うので益獣とされていて狩猟期以外はとれない、昔毛皮を取るため養狸事業をやつていた事もある、山口県向島たぬき棲息地は天然記念物になつてゐる。

北海道札幌に狸小路という有名な商店街がある。

明治二年石狩原野の一角に札幌の建設が始まると今の狸小路あたりには飲食店が集まつて、酔客が商売女性らによくだまされたので、いつか狸小路などとよばれるようになったという。北海道の狸は化かさない筈だといわれているが、内地には館林の茂林寺や木更津の証城寺は別として、狸に関する俗説、特に江戸時代の狐狸譚が数多く伝わつてゐる。

狸汁は室町時代から調理されており貴人の間では珍らしい料理として貴ばれていたという。

(狸の罨丸八畳敷) とあるがこれは昔、金箔をつくる時、天井にだけ穴のある閉め切つた部屋の中で、箔をつくる職人は禪一つの裸で金を叩き伸ばした。金はねばりがあるので、一刃が八畳敷位迄伸びるのであるが、その叩くものが軟かい狸の罨丸を使つた事によるといふが昔語りのことで真偽の程は保証の限りでない。

また昔鍛冶屋が使うフイゴにも狸の皮が必ず使われていたのであるが、これは狸の皮に限るとされていた事が

事実である。

江戸の郊外（現在の目黒、渋谷、新宿、世田谷あたり）では狸や兎、時には猪なども百姓や武士が捕り、それらの市が四谷にあり、そこへ売りに行つたものといわれている。